

聖書宣教会通信

Japan Bible Seminary Newsletter

No. 179
2019.12.1

巻頭言
Greeting

×

安藤 能成

Nosei Ando

聖書宣教会 評議員会議長
(世田谷中央教会牧師)

Profile

1948年東京都出身。東京キリスト教短大卒。日本同盟基督教団正教師。世田谷中央教会主任牧師。



「評議員会の楽しみ」 箴言 24:3

「家は知恵によって建てられ、英知によって堅くされる。」(箴言 24:3)

会議の前に研修生の方々や教師の方々との昼食の交わりに与ることができます。それは和やかな雰囲気の中で食べながら自己紹介し合い、その中で研修生の方々の教会的な背景を知る機会も与えられる豊かなひとときです。

さて、評議員会は理事会で決議された内容について審議し、それが妥当であれば承認し、不適切であれば意見を付けて差し戻します。それは聖書宣教会の運営が神と教会の前に正しく行われて行くためです。

聖書宣教会には諸教会から送り出された研修生をお預かりして神学訓練と献身者としての霊的、生活的訓練を学んでいただいております。責任があり、また諸教会、諸団体から献げられた経済的資産を適正に用いることが求められるからです。

とくに近年はいずれの教派教団も献身者の数が減少傾向にあり、また教会の経済も右肩上がりとは言えない状況にあります。その中から送り出され、献げられる貴重な人的資産と経済的資産ですから有効に活かして行かなければなりません。

会議の前に各議員回りもちでのデボーションがあります。議論の前にみことばによって整えられることは幸いです。そして会議は前回議事録承認、理事会報告、校長報告、行事報告と行事予定、財務報告と監査報告などが提供されます。それから議案に移ります。その内容は開催され

る時期によって異なります。予算案審議のときもあれば決算承認のときもあります。最近の継続的課題は「聖書学研究所開設」に向けての取り組みがあります。

さて、そのようなシビアな内容を取り扱う場ですけれども、会議は喧々諤々という空気の中で行われてはいません。なぜならば評議員諸氏はキリスト教諸団体で選ばれた献身者だからです。ほとんどの方々は聖書宣教会卒の方々ですけれども、議長を仰せつかっている私は卒業生ではありません。また、それぞれ異なる個性と賜物を発揮して議論を尽くします。信仰においても知性においても聖霊によって整えられた人たちですから議論の中にそれが表れます。ときには異論も出ますけれども、じつに建設的であり、必ず良い結論に導かれます。ですから教会の皆さま方にもご安心いただきたいと思います。聖書宣教会は健全に運営されています。

評議員会は議事だけに終わりません。会議終了後にもたれる懇談のときがとても有益で楽しいひとときです。話題はその時々キリスト教会で起きている出来事や神学的な課題に及びます。

No.179 Topics

- p03 奉仕教会の声
- p04、05 後藤茂光師を憶えて
- p06 夫人会の恵み
- p07 学びの窓

赤坂 泉
Izumi Akasaka
聖書宣教会 校長

本紙が皆様のお手元に届くのは12月ですが、私は10月下旬にこれを書いています。台風19号による甚大な被害、教会堂や諸施設の被害などを知らされ、自然の猛威の前に主への恐れとシャロームを待ち望む思いとを新たに祈っています。そして掲題のハガイ書の主のことばを思い出しています。現状を的確に認識し、みこころに応答する私たちでありますように。

後藤茂光先生

元校長の後藤茂光先生が10月5日に地上の生涯を終えて主のみもとに移されたことをお知らせします。90歳でした。そのちょうど一週間前に召されたご夫人と相前後しての「完走」でした。私にとっては神学生時代の恩師・校長であり、大切な鑑かがみです。伝道者生涯を聖書信仰の「戦い」と述懐されたことを心に刻み、先生を通してなされた主のわざのゆえに、感謝と賛美を主にささげます。ご遺族が先生の蔵書を学舎の図書館に献本してくださいました。感謝して、早速活用させていただきます。「戦い」のバトンが受け渡されて行くことを主に期待して。

学舎のことごと

学舎では、数多あまたの恵みを数えて前期を終えました。研修生、教職員一同、主に支えられています。家族も含めて健康課題に直面している者たちも数名。詳しくは紹介しませんが、祈りに加えていただけましたら感謝です。

10月12日に予定していたコンサートは台風で延期の判断となりました。翌週のリトリートは計画通りに行い、幸いな静まりと交わりの機会を得ました。調整期間中には、少人数ではあれ被災地でボランティア奉仕ができたことも主に感謝

します。11月2日のオープンデイ、21日の祈りの日、30日の賛美礼拝など、それぞれ祝福のうちに終わっているはずです。

10月28日には教師講師懇談会、12月6日には理事会と評議員会を同日開催して懇談の機会を持ちます。神学教育をさらに豊かに整え、その経済的な基盤をさらに確かなものとすることは不断の課題です。諸教会の皆様のお祈りとお支えを感謝しています。

卒業と入会

卒業予定者10名は、学舎での最後の学期の学びと諸々の訓練に励み、また春からの奉仕のためにも具体的な備えを重ねています。主に用いていただきやすい器として練り整えられるようにと祈っています。この時期ならではの主の厳しい訓練をしっかり受け止めることが、生涯にわたる主のお取り扱いの恵みに敏感に謙虚に応答できる鍵だと思います。

夏から秋には全国各地で同窓会が持たれます。学びや情報交換の機会、交わりと祈りを深める機会、学舎のためにも祈ってくださる機会です。同窓生を主に感謝しています。個別にも当方の問安の予算で奉仕に出向くことも可能です。ご相談ください。

最後に、入会志願者のためにお祈りをお願いします。みことばに仕える伝道者として主が召している方々がもっと大勢いるはずです。収穫の主と共に祈りましょう。直接献身者が起こされるように。その中から、この学舎に主が託してくださる方々もふさわしく導かれてくるように。聖書信仰に堅く立つ伝道者が諸教会に送り出されるように、どうぞお祈りください。

神学生とともに学ぶ

松村 識

Satoru Matsumura

甲府キリスト福音教会 牧師

私が教会員をお願いしていることがあります。「奉仕神学生の奉仕に期待しすぎない、頼りすぎない」ことです。奉仕神学生を迎える第一の目的は学びのためだからです。誰よりも奉仕することは言うまでもありません。ですが、交わりの中で育てることを心得てくださいとお願いしているのです。

教会は、主の働き人を「生み、育て、訓練し、継承する」務めを持っています。ところが一教会ではできません。また神学校だけでもできません。神学校と協力し、あるいは交わりある教会と協力してそれをするのです。神学校では、知的・学究的に教えることが期待されています。でも、知識で人は救われません。知識で人を導くことはできません。「伝え分かち合う交わり、ともに重荷を負い合う交わり」ができなければ失格です。短い期間ですが教会では、それを学びとることができるようにと願っています。

それは特別なプログラムでできるような性質のものではありません。日々の教会生活の中で、兄弟姉妹との交わりのなかでしか学べないのです。ですから、私は「解説」をします。神の家族ですから、様々なことが起こります。「あれっ」と思うようなことや言葉を見聞きします。でもすべてのことには背景があります。主の働き人として心得ておくべき「心遣い」があります。あるいは、牧師としての「思い」があります。そのようなことを分かち合うことが大きな学びです。働き人は一人では立ち得ません。将来、大切なことを分かち合う同労者との交わりとしても大切です。

教会もそのために献げています。それは、生きる神の教会の交わりを学び、ともに担う者が育つことを祈り願っているからです。

奉仕教会の恵み

早坂 恭

Takashi Hayasaka

東村山福音自由教会 牧師

3年ほど連続して奉仕神学生に来ていただいています。それまでは長い期間、お招きするのをためらっていました。それは牧師として、教会として、お招きした神学生に十分な訓練やケアを提供できないのではないかとの思いからでした。諸教会から遣わされ、祈られている大切なひとりひとりです。他の教会に行かれたほうがより充実した訓練や手厚いケアをいただけるのではないかと考えたのです。しかしながら、奉仕神学生を受け入れさせていただいてから、考え方が変わってきました。彼らの存在によって牧会者である私たち夫婦が励まされ、また信徒が励まされました。そして、その事を通して教会がさらに成長する恵みに、神学生自身もあずかることが出来たのです。それは、神学生にとっても何よりの経験であると思うに至りました。必ずしも整えられた教会に遣わされることが最善

とは限らないことを改めて実感しました。神学生たちは牧師ではありません。しかし、牧師に近い視点で教会を見ようと努めてくれる存在です。聖書を必死に学んでいる最中の神学生です。それは牧師夫妻に同労の仲間を与え、同時に「まずい牧会や説教はできないぞ」という緊張感を与え、信徒にとっても一つの模範になっていると感じます。つまり、教会を活性化する恵みをいただいているのです。同時に、神学生たちが私たちの教会から学んだことを、後の働きに豊かに生かしてくださったらと主に期待しています。近い将来、その姿を拝見する時に、私たちの群が受けたばかりではなく、何かを差し上げることができたと思えるなら幸いです。私たちと過ごした日々が少しでも働きの糧になるのであれば、こんなに嬉しいことはありません。

後藤茂光師を憶えて

後藤茂光師(1929～2019)

中野島キリスト教会、筑波キリスト教会、泉キリスト教会の牧会、協力牧会を歴任。

聖書神学舎においては、1958年から教師、1983年から専任教師、校長、1993年退任。

日本プロテスタント聖書信仰同盟でも実行委員長として聖書信仰の確立に尽力した。

信仰のために戦う (ユダ 1:3)

津村 俊夫
Toshio Tsumura
聖書神学舎 教師

後藤茂光先生が地上の生涯を終えられ、天の御国に凱旋されたことを知らされ、様々なことを思い出しています。数年前に、赤坂先生と一緒に、宇都宮のご自宅に先生ご夫妻をお訪ねした折、先生の口から発されたことばを今も鮮明に記憶しています。

「いつも、いつも、戦いでした。」

先生が、福音の真理のために命を懸けて戦ってこれたことを述懐されてのことばだと思います。「いつも、戦いでした」ということばを発されながらも、なにかしら爽やかな、静かなる確信と言えるものを感じ、大きな感動を覚えたのでした。

先生との最初の接点は、私が大学を卒業して、留学するまでの3か月の聴講生の時であったと思いますが、その頃のことはあまり覚えていません。それというのも、聴講面接の後は授業でお会いすることもなく、私が夏休み明けのクラスに顔を出すことなく渡米したためです。

1974年に8年間の留学を終えて帰国し、後藤先生の後を受け継いでヘブル語のクラスを教えることになりました。その頃は、後藤先生は現代ヘブル語会話から始め、聖書のヘブル語をウィリアム・ハーバーの教科書を用いて教えておられました。私はラムディンの教科書に変更しましたが、先生はそれを励まして下さいました。当時、先生は東京教育大学の大学院での関根先生のゼミに参加されていました。私が関根先生の推薦によっ

て筑波大学で教えることになったことや、私たちとは学風の全く異なる関根先生のお人柄についてお伺いしたり、オリエント学会の会員としての共通の関心もあり、主として旧約の教師としてのお交わりが与えられました。

しかし、1989年秋の羽村移転に伴って、教師会議長としての後藤先生ご夫妻と、私たちの家族4人が新しい学舎に住むことになりました。親しいお交わりを通して、ご夫妻のお人柄を深く知ようになり、公私にわたってよきご指導をいただきました。

やがて、私が、思いがけず翻訳団体である新改訳聖書刊行会の責任を負わされるようになったとき、かつての理事として、また当時、新改訳の頒布のための日本聖書刊行会の全国理事としてのご経験から、いろいろと具体的なアドバイスをしてくださいました。新改訳聖書の販売数が減り、新しい時代に「新聖書」(21世紀訳)を出版しようと、新改訳聖書を過去のものとして扱う動きがあった中で、私の置かれた難しい立場をよく理解し、祈りをもって励まして下さいました。2017年版が完成してご自宅にお持ちしたとき、大変喜んで下さいました。

「聖徒たちにひとたび伝えられた信仰のために戦う」(ユダ 1:3)ようにと、後藤先生がその生涯を通して、後輩の私たちに模範を示して下さいたことを心から感謝し、主の御名をほめたたえたいと思います。



浜田山から羽村への伝統継承

久利 英二

Eiji Kuri

聖書神学舎 名誉教授

「ヘブル語にへばるなかれ」。数々の叱咤とあたたかい激励のことばと、貴重な職責を辿りながら、90 才にして召された後藤先生を心からの敬意をこめて偲びたいと思います。

1958 年の聖書神学舎創立 3 年後、私は横浜・長津田教会で受洗しました。当時の長津田教会は開拓中であり、後藤先生をはじめ神学舎の諸先生が礼拝奉仕に来ておられました。その関係で私は大卒後、神学舎に入学したのですが、1 年生の時の奉仕教会が川崎・中野島教会でした。当時後藤先生は 30 代半ばで、礼拝での説教は簡潔明瞭で、きびしく、礼拝はピリッとしており、時に「礼拝に遅れてくるとは何事だ！」と雷を落としておられました。

先生は牧会伝道を第一にし、神学舎では主にヘブル語・旧約・伝道学等を教えておられましたが、時々、現場での牧会伝道とは何か、大切な言いがたきことをも漏らしてくださいました。また、静かな他の先生がたとは違い、ご自分の考えをはっきり言われる方でしたので、その頃動き出した「聖書信仰」をめぐる論争の際にも、その渦中に入ることになり、神学舎を代表して発言しておられました。そうした先生の姿勢は、福音主義信仰と伝道者養成という神学舎の方向を明確にすることに寄与したと思われます。

中野島での長い牧会の後、神学舎への重荷と召命を

与えられ、1983 年牧会を退かれ、舟喜順一校長の後を継がれました。その後この引き継ぎに合わせられたかのように、神学舎はじまって以来の大変革である羽村移転を迎えました。私には、浜田山の空き地にポツンと立つ学舎と静かで地味な働きをしてきた神学舎への思い入れがあり、移転事業のあまりの大きさに、どう考えたらよいのか不安でした。

神学舎はるか将来を見越して土地購入を決定しましたが、当該土地が縄文時代中期の精進バケ遺跡にあたり、羽村町による発掘調査の必要があり、着工が遅れました。先生は舟喜順一先生と共に、土地購入・建築設計・工事にかかわる膨大な事務・折衝・管理等全般に責任を持ち、持前の能力と主にある信仰をもって乗り越えられ、1989 年移転を完了させました。傍観者でしかなかった私には大きな驚きと感動でした。

羽村移転後、私は、浜田山時代を知り尽くしておられる後藤先生が羽村で引き続き神学舎の伝統を守り、神学教育を続けてくださるものと思っていましたが、2 年後、教師会議長を辞し、62 歳にして牧会伝道に復帰されたのです（筑波）。これにはまた驚きました。後藤先生はやはり牧会伝道を第一にしておられたのです。浜田山から羽村への大移転の中で神学舎の伝統を守ってくださった先生に心から感謝申し上げます。



03 夫人会の恵み Blessings of Fellowship among Students' Wives

研修生夫人として置かれている恵み

とわ

岡村 永遠

研修生夫人

宣教会では、研修生夫人にも「夫人会」を通して学びと交わりの時が与えられています。毎週の夫人会では、ウェストミンスター小教理問答のテキストを用いた学びがもたれています。子育て中で聴講が難しい夫人たちにとって、聖書をより深く知る場として、貴重な時を過ごさせていただいています。また、聖書から夫婦や子育てについて学び、体験談からも多くのことを教えられています。私自身、自分の罪深さと愛のなさに気付かされ、家に戻り泣きながら夫に分ち合い祈り合ったこともありました。主が必要な気付きを与え、夫婦として成長させてくださっていることも感謝しています。他にも夫人会では、証し会、ピクニック、持ち寄りの交わり会、紅葉散策、クリスマス会、送別会、と季節を感じながら、夫人会ならではの行事を通して交わりを深めています。

私たちにとって、今まで慣れ親しんだ場所を離れ、宣教会に来て初めての出産や子育てをすることには不安があります。しかしそのような中でも、子どもや家族が体調を崩した時には「お祈りしてるね」とすぐに連絡をくださったり、必要なものや食べ物を届けてくださったりと、いつも近くで心配し、祈り合い支え合える仲間がいることは大きな励みです。

主人を支え、幼い子どもを抱えながら教会に仕えることの難しさを感じ悩みつつも、今、この時この場所に置かれている恵みを覚えています。

(写真：著者 中央右)

家族寮夫人会の風景

むちき

鞭木 幸子

家族寮舎監

現在家族寮には11組の夫婦と13人の子供達がいいます。夫人たちの多くは、宣教会で過ごす期間が、出産や育児の時期と重なり、出産の喜び、子育ての大変さなど、新しい経験をする時でもあります。また将来の働きに備え、授業を聴講する方、器楽演習を受ける方、パートやフルタイムで働く方など、それぞれに忙しい毎日を送っています。そんな中でも週に一回、フェローシップ・ルームにて、床にマットを広げて子供達を遊ばせながら、夫人会の学びと祈りの時を持っています。メールでも繋がっていて祈りの要請や連絡も取り合っています。勉学と奉仕に終始する夫を支えながら、慎ましい日々を過ごす夫人たちにとって、夫人会は互いに励まし合い、主にある恵みを分かち合っていく交わりの場です。

卒業式が近づく頃、夫人会の送別会で、卒業生夫人が、家族寮での日々を振り返って証しをされます。その証しに私はいつも感動いたします。この家族寮での様々な経験を通し、主のお取り扱いを受け、備えられてそれぞれの教会に遣わされて行くのだということを実感するひと時です。入会時には経済的にも不安を抱えている夫人も少なくないと思いますが、主がそれぞれの必要を満たしてくださる方であることも改めて感謝する時です。

舎監をさせていただく中で、研修生夫人たちの貴重な宣教会での滞在を共にできる幸いを感謝しています。

(写真：著者 中央)

「ダビデの子」イエス・キリスト

三浦 譲
Yuzuru Miura
聖書神学舎 教師

以前に月刊「いのちのことば」にも載せたことですが、それを改めたものです。旧約の人物が新約においてはいかに登場するのでしょうか。例えば、アブラハムは新約聖書中 73 回登場しますが、そのほとんどは「ユダヤ人たちの父アブラハム」といった文脈においてです。モーセは 80 回登場しますが、そのほとんどの文脈は「モーセは…なぜ命じたのですか」と、律法との関係においてです。

では、ダビデの場合はどうなのでしょう。新約聖書中 59 回登場しますが、興味深いことにダビデの場合はそのほとんどがイエス・キリストとの関係で登場します。以下のように新約聖書中に登場するダビデを追っていくと、ダビデは概してイエス・キリストのことを指し示しているように思えます。

(1) イエス・キリストの誕生。メシアがダビデの子孫から誕生するという神の約束 (2 サム 7:12。ヨハ 7:42; 使 13:23; ロマ 1:3; 2 テモ 2:8; 黙 5:5; 22:16 参照) は、イエス・キリストにおいて実現します (ルカ 1:32, 69)。地上におけるイエスの父となるヨセフはダビデの家系であることが強調され (マタ 1:20; ルカ 1:27; 2:4)、イエスは旧約聖書で預言されたごとく (ミカ 5:2 参照)、「ダビデの町」で誕生します (ルカ 2:4, 11)。ゆえに、イエス・キリストの系図には必ずダビデが登場するのです (マタ 1:1, 6, 17; ルカ 3:31)。

(2) ガリラヤにおけるイエス・キリスト。二つのエピソードに目が留まります。一つは、パリサイ人から非難を受けた時に、イエスがダビデを引き合いに出したことです (マタ 12:1-8; マコ 2:23-28; ルカ 6:1-5)。もう一つは、マタイの福音書が「ダビデの子」イエスによる病の癒しを記録することです。 (マタ 9:27-31; 12:22-23; 15:21-28)。イエスによる病の癒しと「ダビデ

の子」には、何か関係がありそうです。

(3) エルサレムへの旅におけるイエス・キリスト。ガリラヤからの旅の中でイエスがエルサレムに到着しようとするとき、共観福音書は「ダビデの子」と呼ばれるイエスの癒しの記事を記録します (マタ 20:29-34; マコ 10:46-52; ルカ 18:35-43)。

(4) エルサレムにおけるイエス・キリスト。イエスがエルサレムに入場する際、人々はイエスをダビデにつながる王として迎えます (マタ 21:9, 15; マコ 11:10)。その後、イエス自身が「ダビデの子」にまつわるメシア論を提起します (マタ 22:41-46; マコ 12:35-37; ルカ 20:41-44。ロマ 1:3-4; 2 テモ 2:8 参照)。

(5) イエス・キリストの受難・復活・昇天。初代クリスチャンたちは、イエスに関わる出来事を特に詩篇を通して解き明かします。詩篇の作者 (ロマ 4:6 他) にとどまらずに、「預言者」 (使 2:30。ロマ 11:9-10; ヘブ 4:7 参照) でもあるダビデを通して、詩篇はイエスに対するユダの裏切り (使 1:16-20)、イエスの受難 (使 4:25-28)、そしてイエスの復活 (使 2:25-32; 13:33-35) と昇天 (使 2:33-35) までも預言されておりました。

上記以外にも、新約聖書においてダビデは信仰の人 (ヘブ 11:32)、神殿建設を願った人 (使 7:45-46) として評価されますが、上述したようにイエスの生涯がダビデの生涯と比べられていること (使 13:22 参照) が大切でしょう。ゆえに、ダビデの権威はイエスのさらなる権威 (黙 3:7) を、ダビデの死はイエスの復活 (使 2:29; 13:36) を、ダビデの王国はイエスのさらにすぐれた王国 (使 15:15-18) を指し示しておりました。

○ 図書館から

中川 朝子

Asako Nakagawa
聖書宣教会 図書館司書

8月に東京基督教大学で行われた第8回神学校図書館フォーラムに参加しましたので、報告いたします。神学校図書館フォーラムは2006年から始まり、いくつかの神学校図書館のスタッフやキリスト教図書関係者、関心のある神学生等が参加して、学びと交流をしています。今回の参加者は講師を含めて14名でした。

午前、ハリストス正教会の「宣教師ニコライの全日記」をもとに、短く学びをした後、東京基督教大学の近くにある当時の信徒のお墓や、旧家に残っているイコンを見させていただきました。ちょうどお墓を見学している時に鐘の音が聞こえてきて、東京基督教大学チャペルの鐘だと教えていただきました。百年前の信仰は継承されませんでしたが、この地にキリスト教の大学がたてられたことに神様の熱心とあわれみを覚えました。

午後は、アーカイブズ工房代表の松崎裕子先生から「司書が知っておくべき歴史資料の扱い：アーカイブズ入門」の講義を受けました。長期保存価値を持つ文書等の収集、管理、公開などについて、実際の作業も紹介されて盛りだくさんでした。「キリスト教会にとってアーカイブズは、福音のあかし、福音伝道、宣教のための情報資源である」と話されていて、午前中の見学とつながって、教会にも必要で大切な作業なのではないかと思いました。

他に各図書館などの情報交換と交わりの時がありました。感謝します。

○ 近況と祈りの課題

- ☐ 上半期を振り返り、豊かな恵みを主に感謝しています。下半期も研修生の学びと訓練が主のみこころに即して行われるように、研修生、教職員、また学舎としてのすべての必要が主によって満たされるようにお祈りください。特に教職員人事の必要を主が整えてくださるように。
- ☐ 日本と世界の各地で主に仕えている同窓生の働きが祝されるように。皆さんがご存知の方々を具体的に覚えてお祈り、お支えください。
- ☐ 来年度の要覧が発行されています。入会志願者が導かれるようにお祈りください。
- ☐ 「聖書学研究所」準備のためにお祈りいただきありがとうございました。次号通信で少し詳しく紹介できると良いと思っています。最終盤の準備もふさわしく導かれるように。